巻 頭 言

小山　博(Hiroshi KOYAMA)

（河内新聞社社長兼社主、・洞窟環境 NET 学会相談役）

壮大な宇宙開発の未来像を描いた本「はやぶさ」が、プロジェクトマネジャー・川口淳一郎によって、このほど発刊された。それと軌を一にして、NPO 法人「洞窟環境 NET 学会」紀要第3号が発刊の運びとなった。「洞窟」は地球の鼓動を聴く神秘の世界である。そこへ足を踏み入れ、魅力に取りつかれた者が集まって、その素晴らしさをより多くの人に知ってもらい、良好な環境を整備して後世に伝えようと2008年9月、NPO 法人「洞窟環境 NET 学会」を立ち上げた。本紀要は、会員たちが、その熱い思いを綴った第3回の報告書である。

洞窟学の専門家から工学、医学、植物学の学究をはじめジャーナリスト、コンピューターのプログラマーなど多彩な顔触れを揃える学会だが、牽引役は会長の沢勲氏である。大阪経済法科大学名誉教授として、専門の情報科学論を教えるかたわら、2002 年から10年間、洞窟学の講座を開き、受講学生は 4000 人を超える。大阪経済法科大学名誉教授として専門の情報科学論を教えるかたわら、2002 年から洞窟学の講座を開き、受講学生は 4000 人を超える。また、沢勲会長は世界各地の洞窟を調査、収集した資料を整理して2004 年に自宅に「ミニ洞窟」を作ったのを皮切りに、2007 年には「さわ洞窟ハウス」を、そして 2009 年 6 月には集大成として「洞窟情報サロン」を完成させた。洞窟の写真や標本、模型など 1000 点を展示、一般に開放している。こうした取り組みは多くの新聞、テレビでも紹介され、子どもたちが集団で見学に訪れるなど洞窟の魅力を発信する拠点となっている。

洞窟環境そのものは、天然の住居地としての利用に始まり、信仰・祭祀の場としても使用されてきている。過去における人間利用の洞窟遺跡の多くは、埋蔵文化財や世界遺産として保護され、遺物の研究は過去の「洞窟環境」のみならずに“当時の人間及びその生活解析のデータを提供してくれている。

本紀要の3号では、①古代国家成立期、八尾の仏教戦争と聖徳太子の偉業　～インド・中国から八尾へのシルクロードの終着点、②大阪府八尾市、古代国家成立期、仏教戦場、樟本神社(木の本)の由来と鳥居　～物部守屋・蘇我馬子・聖徳太子、神社の由来の4ヶ国語（日英韓中）用語～共同研究として、執筆しました。大阪経済法科大学、関西大学校友会には資料提供など多大な協力・ご支援を賜りましたことに感謝申し上げ巻頭のことばの結びとしたい。

学会紀要の要点

八尾市史（P366・368）による樟本神社は、次のように要約できる。敏達12年（583）7月、百済にいた日羅を百済王に申入れて日本への召喚を認めさせた。ところが百済から帰国の際、日羅は暗殺された。日羅の日本にとどまることが百済国にとって不利と感じたからであろう。天皇は日羅を小郡の西の畔の丘に葬らしめた。これが高樹山日羅寺であったが、今は樟本神社の神域の東側に荒れ果てた小さな寺となって、ようやく昔の名を留めている。八尾市域は当時、文化の中心地であった大和に隣接し、大陸文化の大和へ流入するその通路にあたっていたから他国よりは比較的早く開け、寺院も多く建立された。その寺院の分布をみると大体、大和川の沿岸地帯と高安の山麓地帯に分けられる。

古代国家成立期、八尾の仏教戦争と聖徳太子の偉業は、次のように要約できる。

587 年　物部守屋、蘇我馬子・聖徳太子の連合軍と戦い、物部氏滅亡

593 年　第 33 代推古天皇（女帝）時代、摂政となる、四天王寺創建、守屋の所領施入。

594 年　第 33 代推古天皇（女帝）時代、大聖勝軍寺創建

604 年　第 33 代推古天皇（女帝）時代、17条憲法制定、豪族の勢力を押さえて天皇の権威を確立した功績は大。

672 年　第 40 代天武天皇時代、日本古代最大の内乱「壬申の乱」起こる、高安城の税倉を焼く。

675 年　第 40 代天武天皇時代、天皇、高安城に行幸。
1028 年　平忠常の乱が発生。1031 年に河内源氏頼信が追討する。後に、頼義、義家が活躍。

地域貢献として「大阪府西淀川区にある 8 神社の由来と社殿」に関する論文は。特に、8 神社の社殿と鳥居の模型製作は史上初の作品である。この作品は、区民祭りにも展示を行っている。これは、本学会の目指す「文化遺産の伝承」をテーマとしたものであり、戦災・地震・台風などで被害を受けながらも、都市の中で地域住民の協力の下で生き残ってきた、最古 869 年に創建され、1000年間の宗教的文化財に焦点を当てたものとして注目される。

その他に、由良薫教授の万葉集と洞窟―「三穂の石室」(和歌山・美浜町)を検分から「洞窟と万葉集」関係が深められ、梶川伸教授の「四国遍路における洞窟の役割」の内容は、「洞窟とお遍路」関係が深められた。由良薫教授の「震災とメディアー東日本大震災をどう報じたかー」の内容は、日本史初の災害の報告である。八頭司彰久博士の「視野を広げて―金融のグリーン化についての研究―」と上野裕博士の「戦前期日本の都市発展と都市政策・計画」は貴重な論文で後世に愛用されると確信する。下記の表は活動報告の統計であります。最後に、「洞窟と環境」、「洞窟と寺院」、「洞窟と神社」、「洞窟と遍路」の関係が、さらに深められたことに対して、関係各位に感謝申し上げます。

表 「洞窟環境 NET 学会」紀要に発刊した年別の実践と活動報告件数

項目	2009 年度	2010 年度	2011 年度	合計
1. テレビ・ラジオ出演	4	5	28	37
2. 新聞等記事	17	29	55	101
3. 展示会	9	11	13	33
4. 講　演	22	11	15	48
5. 論文と資料	19	35	26	80
6. フィールドワーク	16	8	19	43
年度別合計	87	99	156	342
会員数(人)	20	14	26	60